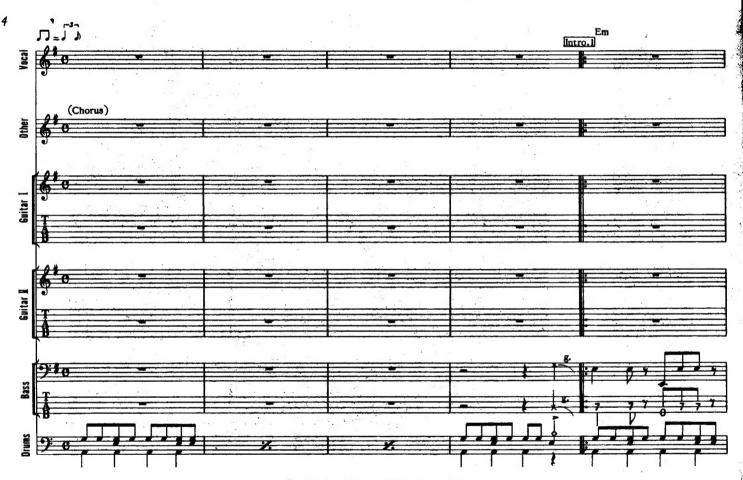
RUNNING FREE

Words & Music by Steve Harris & Paul Di' Anno

この曲のリズムは、8分音符が3連のノリのシャッフル・ビー トになっている。まず最初は、ドラムのビートからスタートして いるが、このパターンではハイハットの代わりにタムを叩くパタ ーンになっている。このタムは、正確な3連符で叩くようにした い。Intro①からペースもスタートしている。この曲のペースは、 ハギレのよい音でリズミカルにプレイするようにしよう。 ピッキ ングは、指ではなくピックを使って行った方がよいだろう。ギタ ーは、Intro②からのスタートだ。ディストーション・サウンドで のコード・バッキングを行っているが、これは、2本のギターが ユニゾンで重ねられているようだ。ショート・ディレイやコーラ ス系のエフェクターをかけて、ダブリングの効果を出してもよい だろう。「〇の部分で弾かれているギター2の3連のリフは、2本

のギターで3度のハーモニーを弾いているものだ。ここは、リズ ムガばらばらにならないように、ぴったりとそろえて弾くように したい。〇の最初の部分のボーカルにはディレイがかけられてお り、そのタイムは、大体1拍半の長さに合わせられているようだ。 □の部分のギター1は、右手を弦にくっつけるようにしてミュー トレながら弾いている。ここのリズムも、しっかりとドラムのタ ムと合わせるようにしよう。この部分の繰返しは、4回行われて いるので間違えないように。旧の部分のギター2も、3度の音程 によるハーモニーだ。力強いピッキングで正確に弾くようにした い。エンディングのリフも同様に、リズムをしっかりと合わせて プレイするようにしよう。



© 1980 by Iron Maiden Publishing (Overseas) Ltd.
The rights for Japan assigned to CBS/SONY SONGS



















PHANTOM OF THE OPERA

オペラの怪人

Words & Music by Steve Harris

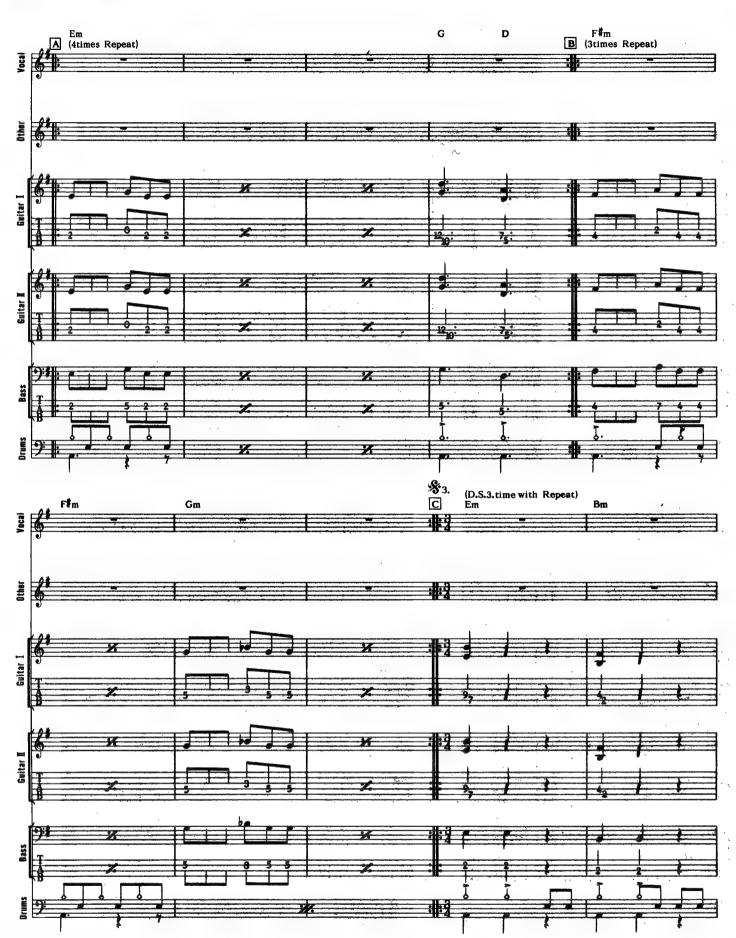
この曲は、かなり長い演奏になっており、大曲といえそうだ。
テンポ・チェンジも何度かあり、組曲のような構成になっている。イントロなどの前半部分は、かなりアップ・テンポの演奏だ。 治 拍子や 計 拍子などが入り乱れて出てくるので、複雑な曲のように感じられるが、メロディーのながれをつかんでしまえばそれほど難曲ではないはずだ。ギターのサウンドは、ハードなディストーションをかけたものになっており、ピッキングもかなり強めに行っている。ベースは、太いどっしりとしたサウンドで弾くようにしたい。また、スピードの速い細かいフレーズになっているので、ピックを使って弾いたほうがよさそうだ。ドラムは、パワフルな演奏になっているが、スネアはあまり力を入れ過ぎずに軽い感じで叩くようにしたい。リズムがもたついたりしないように、安定したピートをキープしよう。旧からは、テンポが変化して遅くな

っている。この部分のギターでスタッカートのつけられている音は、右手を使って弦をミュートしながら弾くとよいだろう。ドラムは、16分でハイハットを刻んでいるが、すこしオープンさせてリズムに表情をつけるようにしたい。団からまたテンポが変わっている。また、この部分の8分音符は3連符のノリになっているので注意しよう。ここでは、ギター1がソロを弾いている。フロント側のピックアップを使い、マイルドな感じのディストーション・サウンドになっている。ギター2は、アルペジオ・スタイルでパッキングを行っているが、これはディストーションさせずにクリアなサウンドで弾いているものだ。区で弾かれているベースのフレーズは、ピッキングに気をつけてもらいたい。3連符の連続になっているので、リズムが乱れないように注意してプレイしよう。















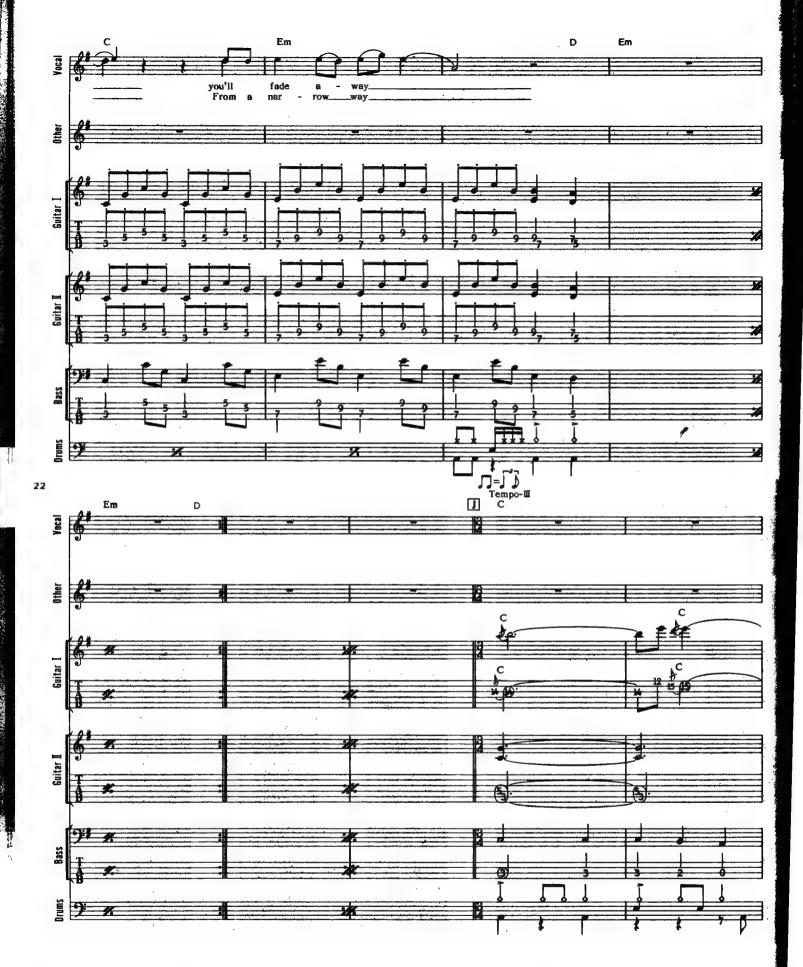


















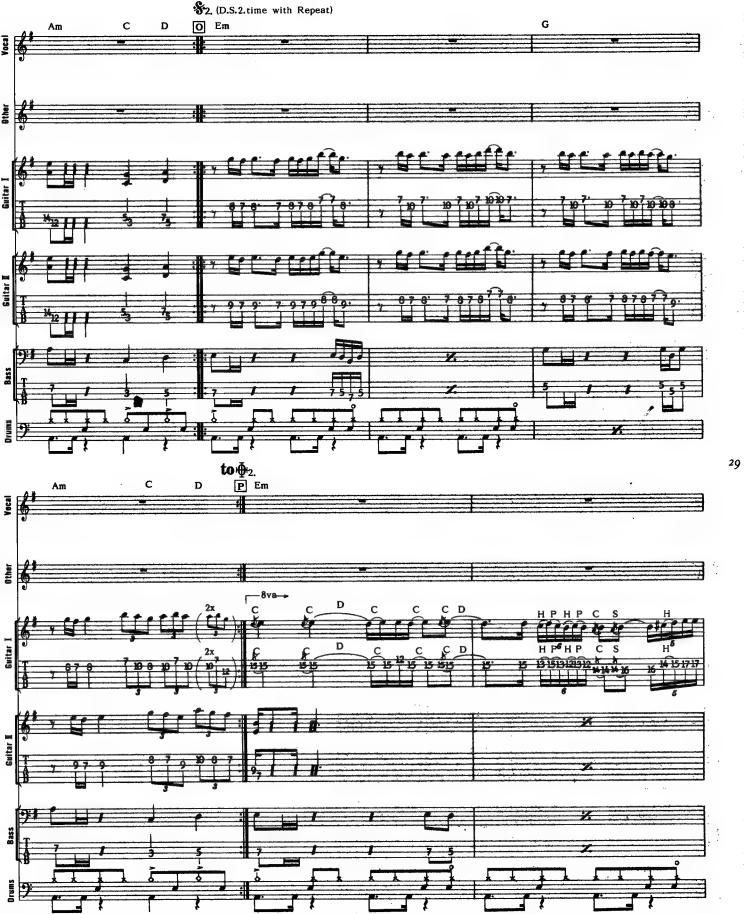




STATE OF STREET













Bass

Drums

IRON MAIDEN

鋼鉄の処女

Words & Music by Steve Harris

バンド名と同じタイトルの曲だ。ちなみにアイアン・メイデンとは、中世にあった拷問道具の名前だそうである。この曲では、まずギター1本のリフからスタートしており、5小節目からもう1本のギターがハーモニーをつけている。ここはドラムのサポートがないので、リズムが乱れないように注意してプレイしよう。ドラムとベースは、Intro②からのスタートだ。ベースは、かなり強いピッキングで弾いている。ピックを使い、8分音符は全てダウン・ピッキングで弾くようにしよう。ドラムも1つ1つの音を力強く、パワフルな演奏を心がけてもらいたい。ハイハットは、ハーフ・オープンにしてカー杯叩こう。この曲では、曲の構成にも注意が必要だ。D.S.が4回もあり、すこし複雑になっているの

で演奏順序を間違えないようにしたい。Coda@の2小節目から、テンポがすこし遅く変化している。リズムも、16分音符でシンコペーションしたものになっているので要注意だ。各パートがばらばらにならないように、しっかりと合わせるようにしよう。特に巨の後半ではペース・ソロの部分もあり、常に正確な16分音符を弾くようにしなければならない。ダウンとアップを繰返すオルタネイト・ピッキングで、1音1音しっかりとピッキングすることがポイントだ。Coda@のエンディングは、タイミングに気をつけて演奏しよう。最後の部分ではギターがフィル・イン・フレーズを弾いているが、各プレイヤーの呼吸を合わせるようにして、しっかりとキメよう。



© 1980 by Iron Maiden Publishing (Overseas) Ltd.
The rights for Japan assigned to CBS/SONY SONGS

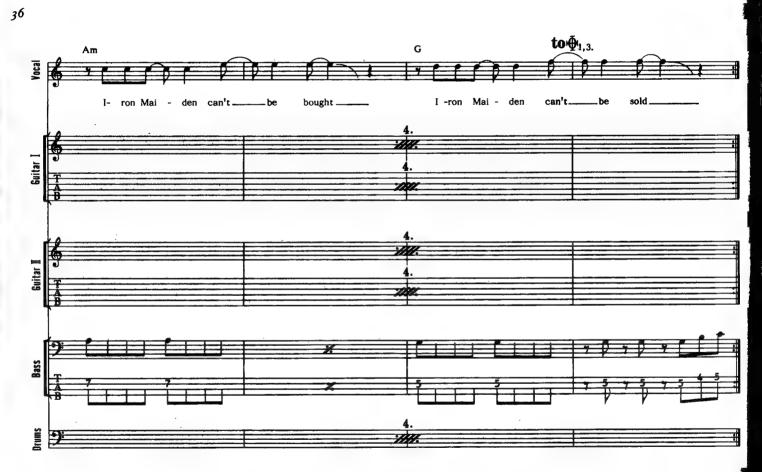








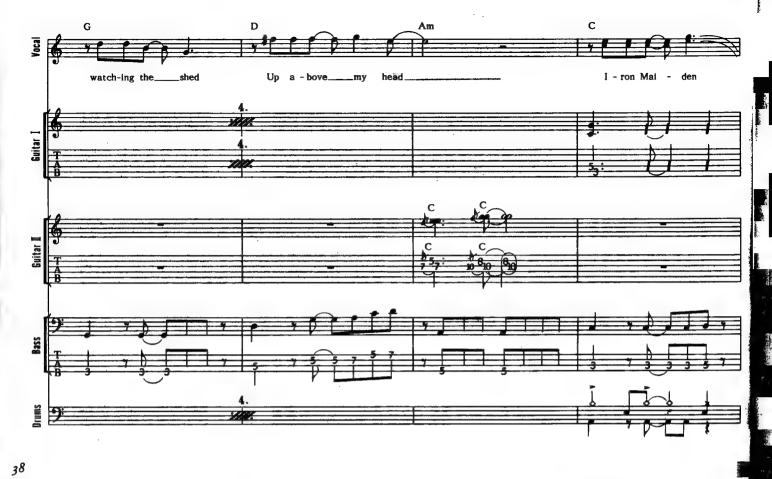




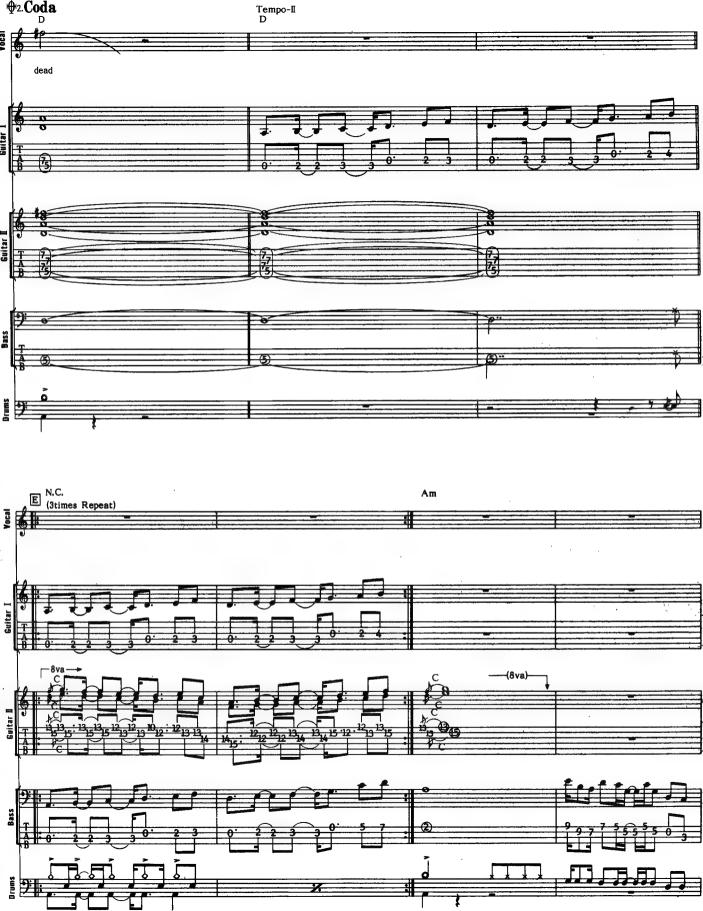




•











Words & Music by Steve Harris

ベースとドラムによる細かいリフから、この曲はスタートしている。ベースとハイハットの16分音符を、しつかりと合わせることがポイントだ。ベースは強めのピッキングで弾き、アタックの強い音を鳴らすようにしよう。ドラムは、ハイハットをすこしオープンにして叩いている。また、このハイハットは片手で叩いているようだが、リズムが乱れるようならば、無理をせずに両手を使って叩くようにしよう。イントロの3小節目から、ギター2がソロ・フレーズを弾いている。ここは、ディレイをかけてのプレイだ。ディレイ・タイムは、4分音符に合わせて弾くとよいだろう。このディレイは、囚や回のフィル・イン・フレーズにもかけられている。四からはギター・ソロだ。チョーキングやアーミングによる、すこしトリッキーなフレーズからスタートしている。

□の3小節目から弾かれているフレーズは、ハンマリングとプリングを繰返して、トリルの要領で弾いているものだ。3弦だけを使っており、左手を上方にスライドさせながらプレイしている。ライト・ハンド奏法のようにも聴こえるが、ここは左手だけで弾いているようだ。その他にも、かなりスピードの速いフレーズが多いが、ハンマリングやプリングのテクニックをうまく使って弾くようにしよう。□の最後の部分から□にかけて、ギター1、ベース、ドラムのユニゾン・フレーズになっている。ここは正確なリズムで、しっかりと合わせるようにしてもらいたい。この曲は16ピートのリズムで、ドラムなど16分音符を使ったパターンが多いが、決して力を弱めずに、常にパワフルに演奏するようにしよう。



© 1981 by Iron Maiden Publishing (Overseas) Ltd. The rights for Japan assigned to CBS/SONY SONGS







С

Em

В

Em















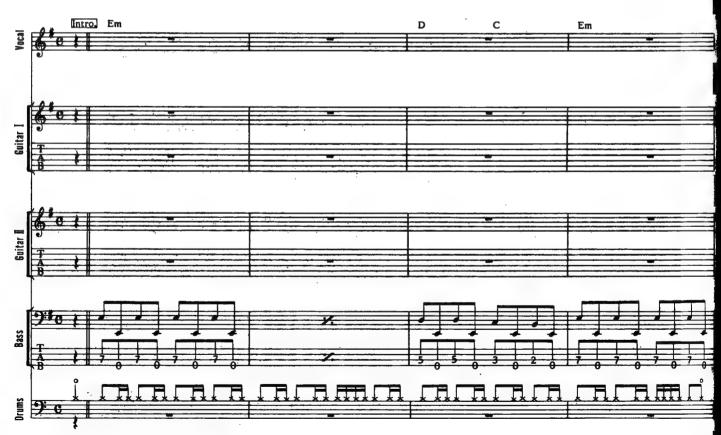




Words & Music by Steve Harris & Paul Di' Anno

この曲も、16ピートを基本リズムとして演奏されている。イントロの最初の部分は、ベースとドラムからのスタートだ。この曲のベースは、すこし硬めのサウンドで弾かれている。ピックを使って弾いたほうがよいだろう。ギターは、4小節目からのスタートだ。ギター1はトリルを行っているが、これはハンマリングとプリングを素早く繰返しているものだ。ギター2は、ハーモニクス奏法を行っている。これはナチュラル・ハーモニクスであり、譜面のタブ譜の位置を左手の指で、軽く触れるようにしながらピッキングすればよい。この部分のギターは、2本ともディストーションさせずに、クリアなサウンドで弾いている。ドラムのハイハットは、両手を使って叩けばよいだろう。時々オープンさせて、アクセントをつけているので注意してもらいたい。囚の部分のギ

ター1は、アルペジオ奏法の要領で弾くとよい。ピッキングに気をつけて、正確なリズムをキープすることがポイントだ。ここからのギター2は、ディストーションさせてアクセントをつけるようにプレイしよう。②の最初の部分、ギター2は、Aのコードの分散和音風のフレーズを弾いている。ここの部分のコードはEmはので、すこし不思議なサウンドになっている。ここは、力強くビッキングして、すこしピッキング・ハーモニクス気味に弾くとよいだろう。凹の部分は、2本のギターが3度の音程でハーモニーのリフを弾いている。ここは、ヴィブラートをかけるようにして、すこしラフな感じで弾いているようだ。凹と辺の部分は、2本のギターが順番にソロを弾いている。スピードの速いフレーズが多いが、一つ一つの音を力強くピッキングしよう。



© 1981 by Iron Maiden Publishing (Overseas) Ltd.
The rights for Japan assigned to CBS/SONY SONGS











G

С

Am

1. Am



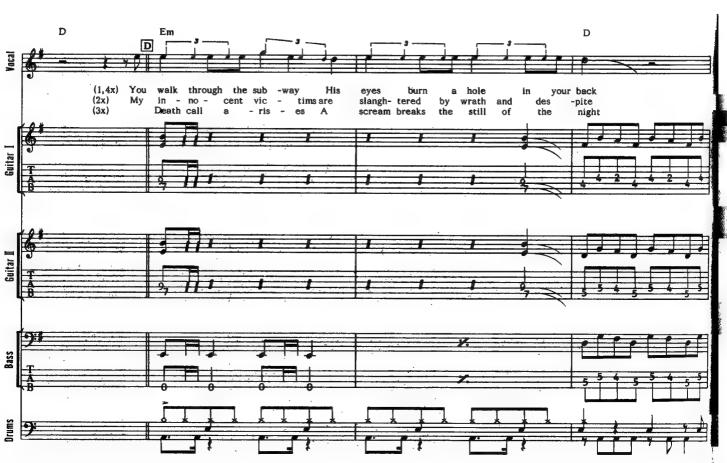
Race

Vocal

Guitar I

Guitar 1

Bass







D

Έm

















2000

Bacc

Cuitar II

__

Guitar I

Guitar II

Bass

Drums















DRIFTER

ドリフター

Words & Music by Steve Harris

この曲では、リズムが2種類出てくるので気をつけよう。前半のTempo Iは、すこしアップ・テンポの8ピート・リズムだ。また、譜面にも指示されているように、8分音符は3連符のリズムで演奏されている。これは、いわゆる「シャッフル・ピート」と呼ばれているものだ。Intro①はギター1のリフからスタートしているが、ここは、アルペジオ奏法で弾くようにしよう。5小節目からのギター2は、2本のギターでハーモニーを弾いている。ベースもユニゾンで重ねられているので、リズムをしっかりと合わせるようにしよう。ドラムは、Intro②からのスタートだ。シンプルな8ピート・パターンを叩いているが3連のリズムを正確にキープするようにしよう。また、ハイハットはオープン気味にしてパワフルな演奏を心がけよう。匠の1小節前からリズムが変わ

っている。ここからはスロー・テンポになっており、シャッフル・ピートではなくノーマルな16ピートのリズムだ。 EIは、ギター・ソロだ。ここはフロント側のピックアップを使い、ソフトなディストーション・サウンドで弾かれているようだ。 ディレイもかけて、広がりのあるサウンド・メイキングを行うとよいだろう。この部分のギター2は、アルペジオ奏法によるバッキングだ。 EIからは、再びもとのテンポに戻っている。 ただし、ここはシャッフル・ピートではないので気をつけよう。 図の部分で弾かれているギター1のフレーズは、トレモロ・ピッキングのテクニックを使っているものだ。ここは、かなり強めにピッキングするようにしよう。 田の部分でのギター・ソロは、エフェクターとしてワウを使っており、ここも力強い演奏を心がけたい。



© 1981 by Iron Maiden Publishing (Overseas) Ltd.
The rights for Japan assigned to CBS/SONY SONGS



tar I may

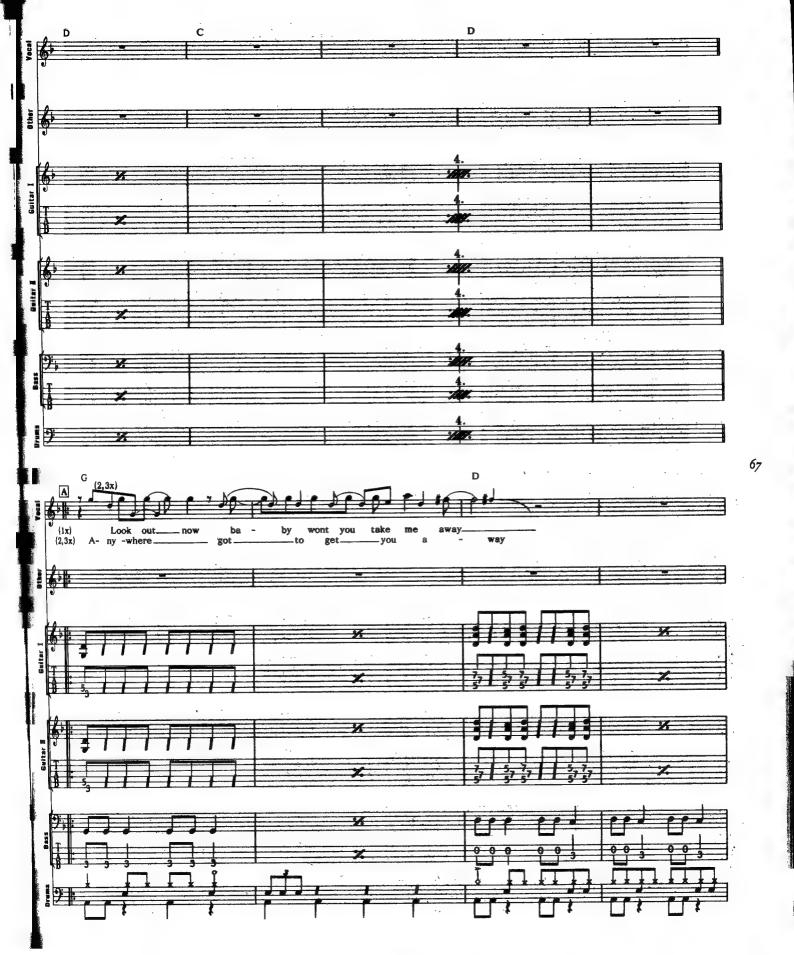
tar I

20

ě

Guitar I

11. 1115

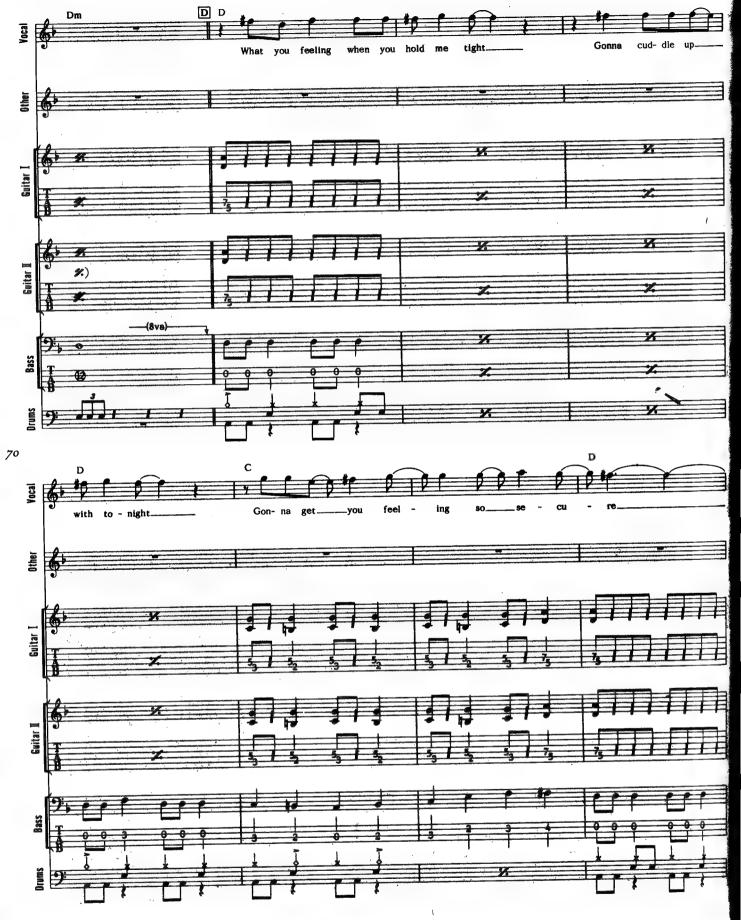




Vocal

Guitar I





.

Othor

Guitar I

Guitar 1

Bass

Drums









Guitar I

Bass

Drums







Vocal

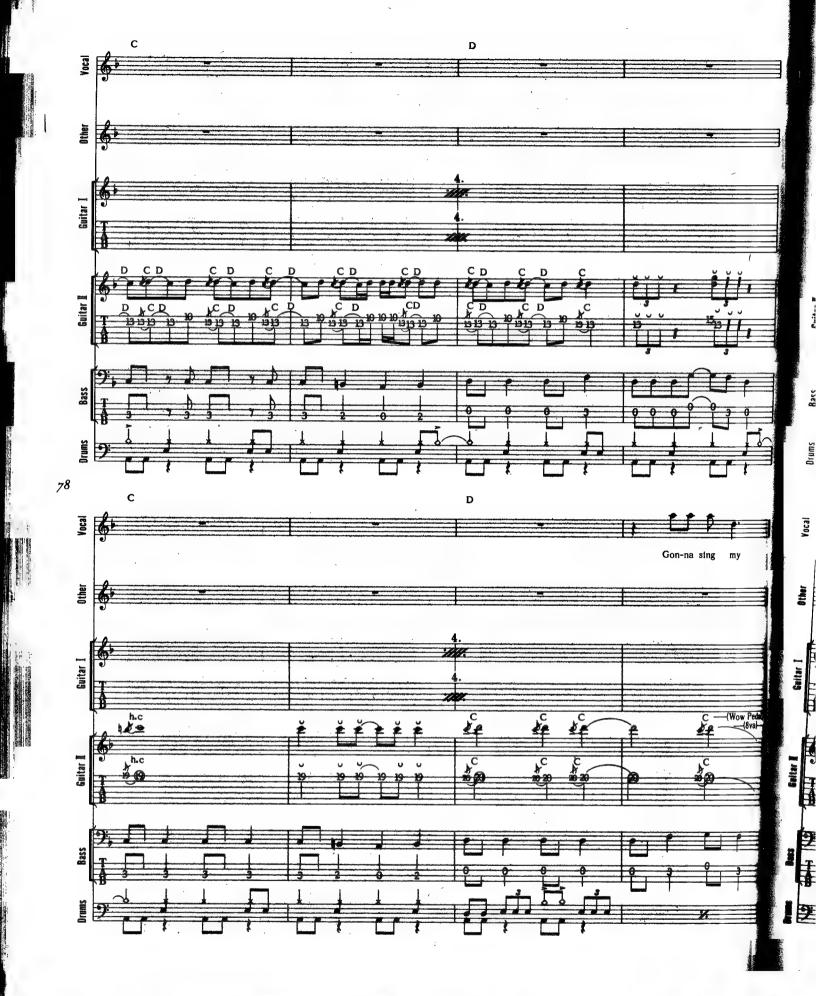
Guitar I

Guitar II

Bass

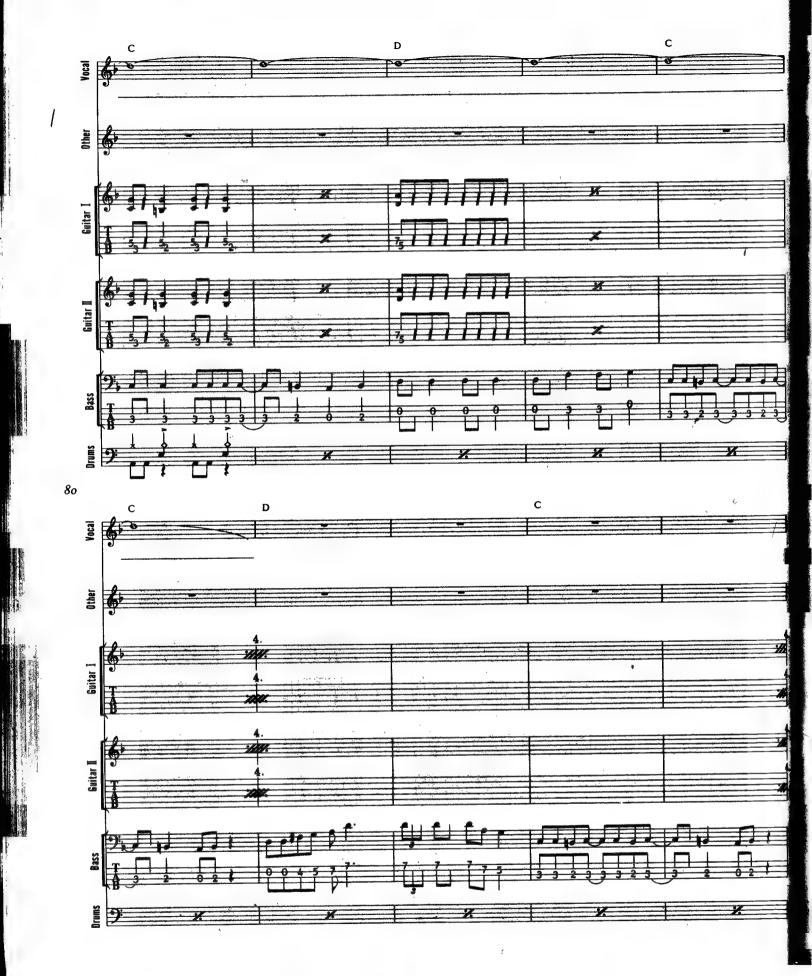
Drums













BUN TO THE HILLS

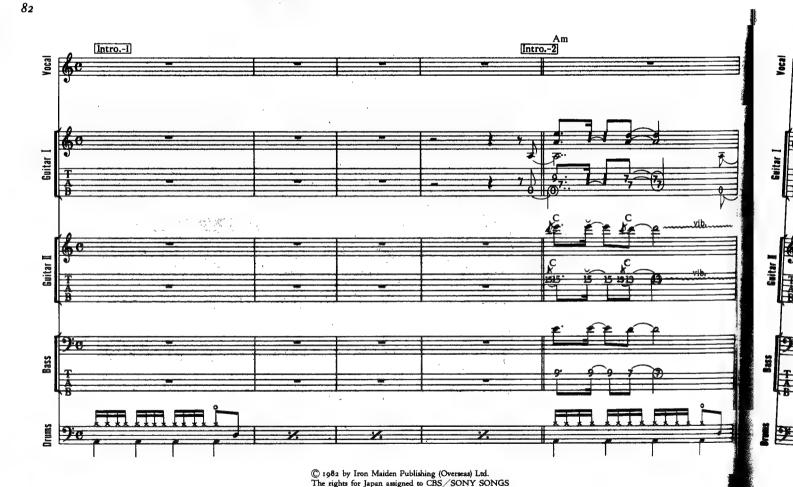
誇り高き戦い

Words & Music by Steve Harris

ドラムによる16ビートのリズム・パターンから、この曲はスタートしている。ハイハットは、両手を使って叩くとよいだろう。4 拍目は、ハイハットをオープンさせてアクセントをつけているが、その他の部分もハーフ・オープン気味にして叩いているようだ。イントロから弾かれているギター1のリフは、5弦の開放音を鳴らしながら弾いているものだ。このリフには、コーラス系のエフェクターがかけられている。ギター2は、チョーキング・フレーズを弾いている。これは、ベースとユニゾンのフレーズになっているので、リズムをしっかりと合わせて弾くようにしたい。 回の部分から、テンポが速くなっている。ベースのフレーズはシンプルなものだが、スピードが速いので大変だ。ピッキングがいい加減にならないように、各プレイヤーのノリを合わせるように

して、安定したリズムで演奏するようにしよう。 Dの部分などで、ドラムの音がだぶって聴こえている所がある。 どうやら、2つのドラムがユニゾンで重ねて録音されているようだ。 Eの部分は、ギター・ソロだ。 このギターは、高音部をすこしプーストさせたようなディストーション・サウンドで弾かれている。 テンポが速いので、かなり速弾きフレーズが多くなっている。 ハンマリングやプリングのテクニックをうまく使って、流れるように弾くことがポイントだ。 Eの9 小節目のトリルは、大体16分音符のタイミングで行うとよいだろう。 12~14小節目では、アーミングも行っている。 右手でアームを持ち、ヴィブラートをかけるようにしながらピッキングすればよい。

Guitar I





Am



Am







Vocal

Suitar I

Guitar 1

Drums



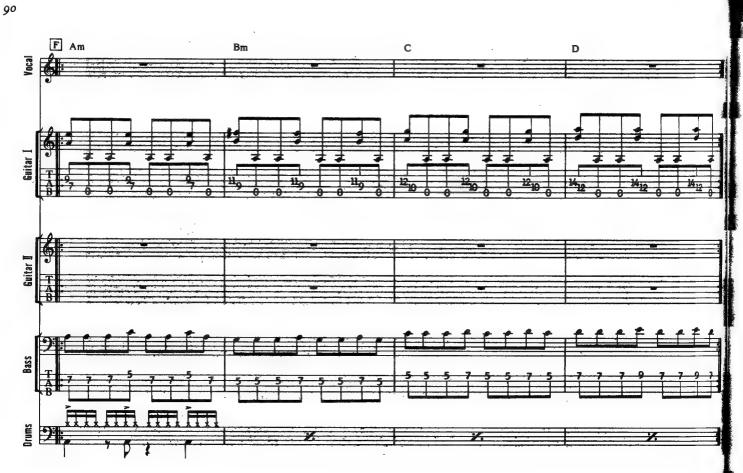


Bass

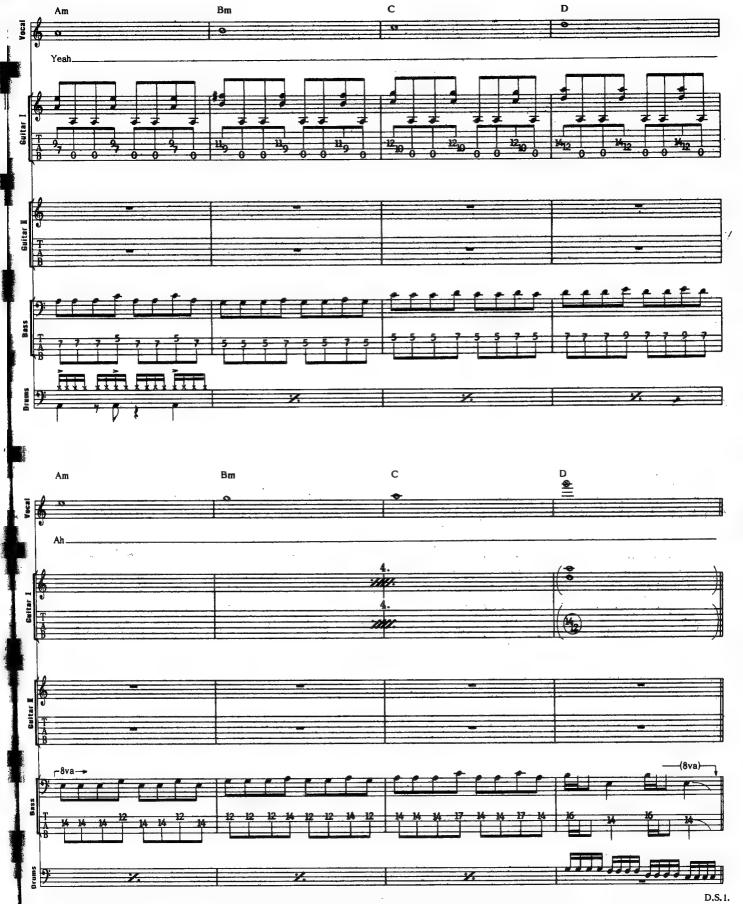
















FLIGHT OF ICARUS

Words & Music by Adrian Smith & Paul Dickinson

かなりヘヴィなナンバーだ。ギターは、ハードなディストーシ ロン・サウンドでプレイしており、ベースやドラムもかなりパワ フルな演奏になっている。基本となっているリズムは16ビートの ものだが、なるべくゆったりとしたノリで演奏したい。イントロ の部分から叩かれているドラムのパターンでは、シンバルやハイ ハットがあまり使われていないが、その分パワフルな演奏になっ ている。スネア等は、思いっきりパワフルに叩く様にしよう。バ スドラは、16分のリズムガ多くなっているので、ダブル・ペダル のセットを使った方が叩きやすそうだ。このバスドラの16分音符 を正確に叩くことガポイントとなるだろう。もちろんシングル・ ベダルでDDいてもかまわないが、リズムが乱れないように細心の 注意を払う様にしよう。IDの部分のギター1にある×印の音は、

左手でミュートしながらピッキングしているものだ。これは、ブ ラッシングとよばれるテクニックの1つだが、リズムを強調する とき等に有効なテクニックだ。◎の部分などで、ベースは高音部 のフレーズを時々弾いているが、こういったフレーズではグリッ サンドをうまく使ってメロディアスに弾くようにしたい。旧から は、ギター・ソロになっている。かなりスピードの速いフレーズ ガ多く出てくるが、ハンマリングやブリングのテクニックをうま く使って弾くようにしよう。回もギター・ソロになっているが、 ここからは音質がすこし変わっているので、別のプレイヤーによ って弾かれているようだ。口の前半では、2本のギターが3度の ハーモニーで弾いている。ここは、リズムをぴったりと合わせる ようにしよう。



© 1983 by Iron Maiden Publishing (Overseas) Ltd. The rights for Japan assigned to CBS/SONY SONGS



Guitar I

Guitar 🎚

Bass

Drums

Vocal

Guitar I

Guitar II

Bass

RMS





Guitar I

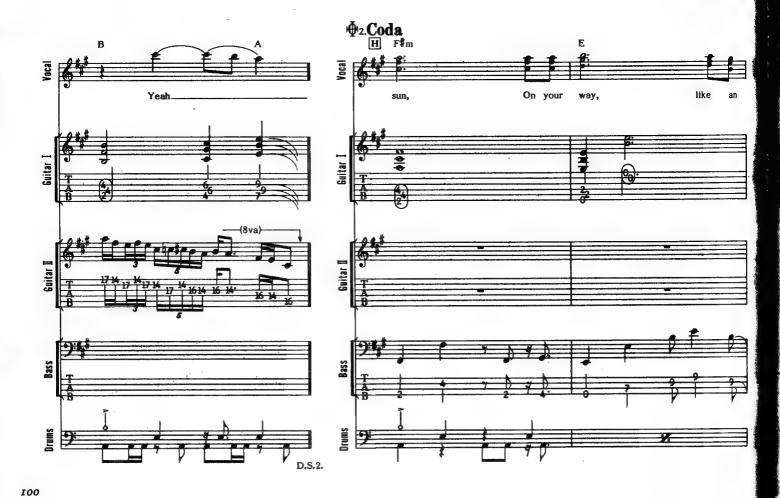
















I F#m

D

E(onG#)











ACES HIGH

撃墜王の孤独

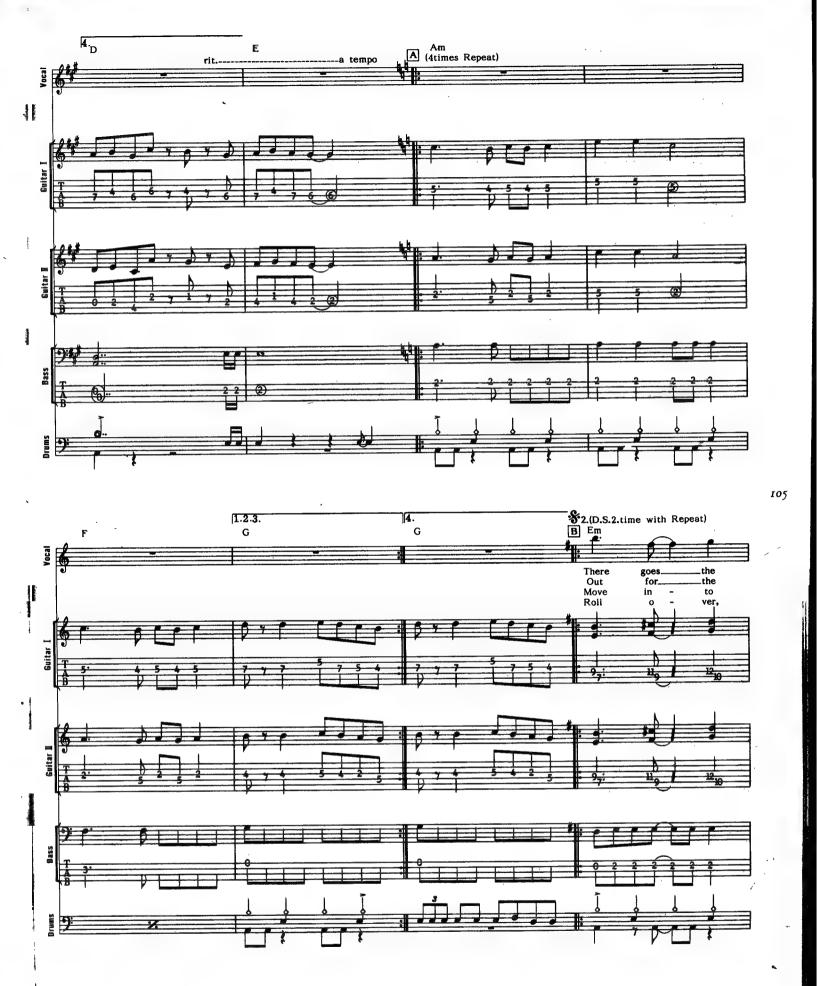
Words & Music by Steve Harris

イントロは、2本のギターがハーモニーのリフを弾いている。ここは、4小節のパターンを4回繰返しているのだが、ペースとドラムの1回目のリズムだけすこし違っているので気をつけよう。複雑なリズムになっているが、呼吸を合わせるようにしてプレイするように。因の部分から、8ビートのリズムがスタートしている。この曲はアップ・テンポで演奏されているので、リズムがもたついたりしないようにしだい。固と口の部分は、同じパターンをEmからAmへ転調させているものだ。回のヴォーカルにはディレイがかけられており、やまびこのような効果を出している。ディレイ・タイムは2拍の長さだ。旧の部分は、ギター・ソロだ。チョーキングした音を細かくピッキングする、トレモロ・ピッキングのフレーズからスタートしている。9小節目などの3連符の

フレーズは、かなりの速弾きフレーズだ。ここは、プリングのテクニックを使って弾いているが、ハンマリングと組み合わせて、ピッキングせずに左手だけで音を鳴らすようにしてもよいだろう。
①の前半で弾かれているフレーズも、同様のテクニックを使ったものだ。ここは左手だけでも十分に弾けるが、右手も使ってライト・ハンド奏法を行ってもよいだろう。このフレーズは、弦をフレットに叩きつけるようにして鳴らすのがポイントだ。この曲のエンディングの部分だけ、さらに2本のギターがオーバー・ダビングで重ねられている。ここは、リタル・ダンドさせてテンボを落としている所なので、タイミングをしっかりと合わせて弾くことが大切だ。

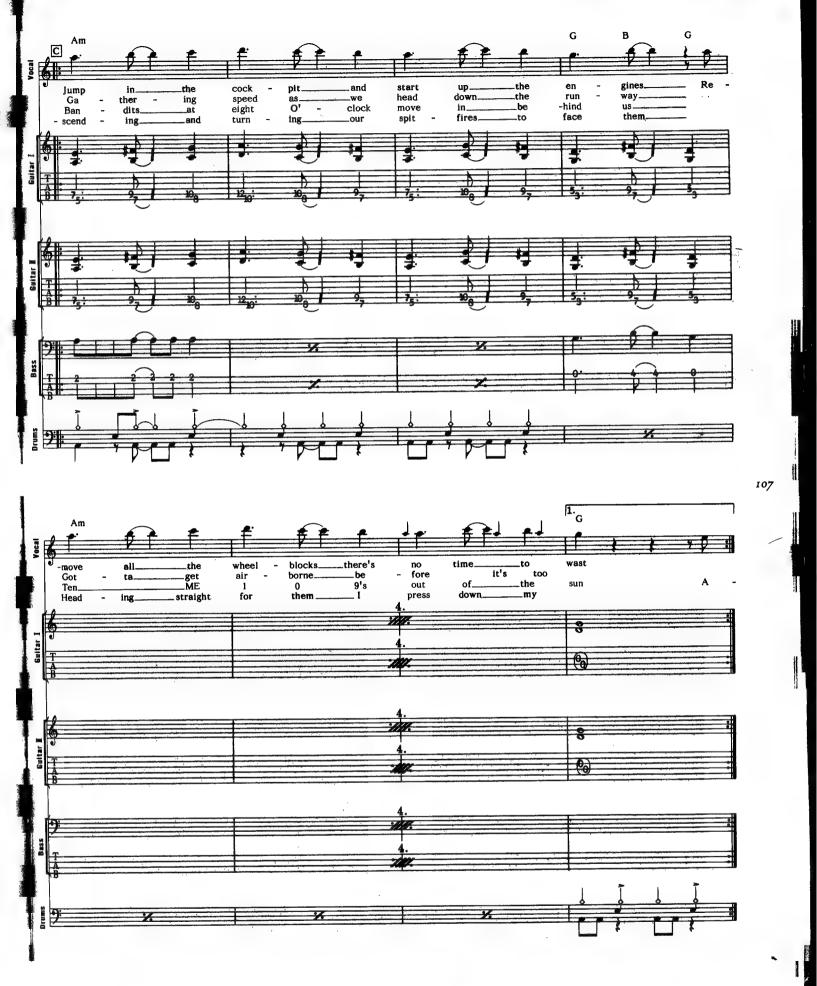


© 1984 by Iron Maiden Publishing (Overseas) Ltd. The rights for Japan assigned to CBS/SONY SONGS





Vacal

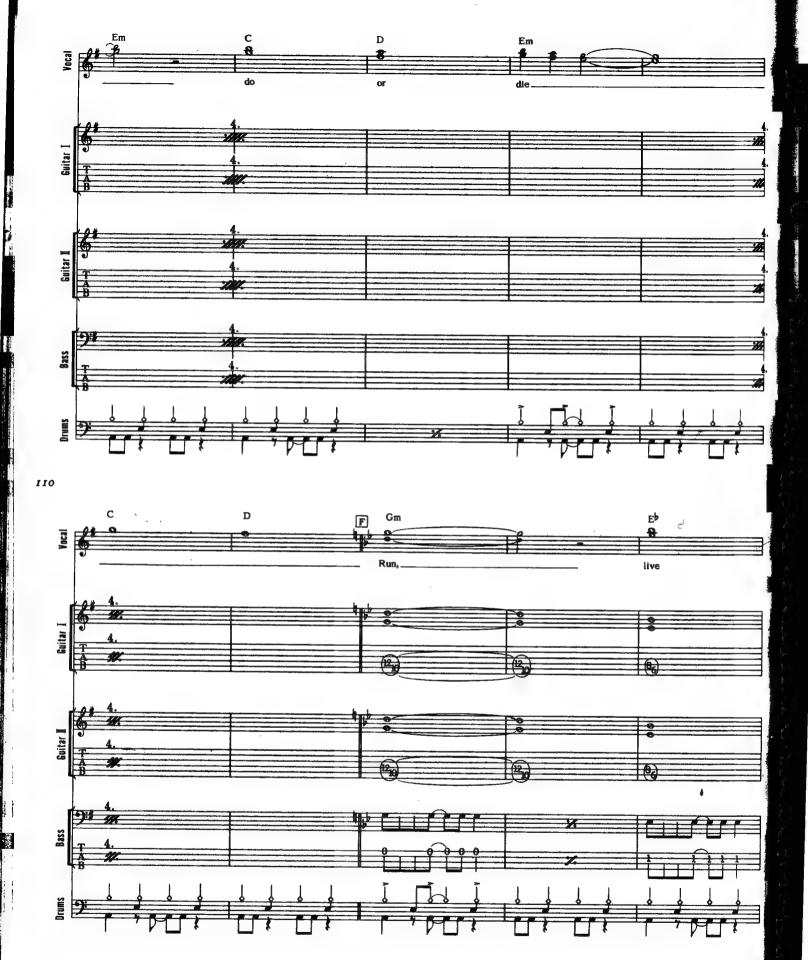








The second secon









Am D Am D Am toon



H Am

Am











74. Frit.

G

1.**2.3**. F

(Manual)

G

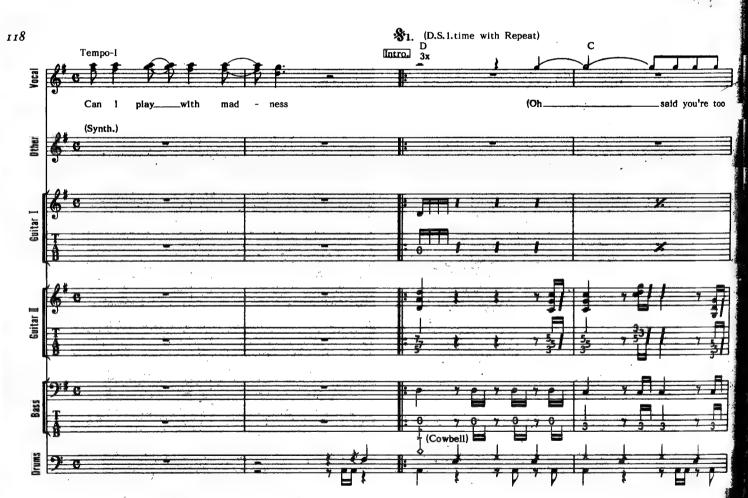
CAN I PLAY WITH MADNESS

Words & Music by Steve Harris, Adrian Smith & Paul Dickinson

この曲は、2小節のコーラス・フレーズから始まっている。そ れに続くイントロや囚の部分では、16ピートのリズムによる演奏 だ。ここでのドラムは、カウベルを使ったパターンを叩いている。 これは、割りと大きめのサイズのカウベルを使っているようで、 かなり低いサウンドになっている。上段のギター1はDの音を単 音で弾いているが、ここはすこしミュート気味に弾くとよいだろ う。2本のギターは、共にかなりハデなディストーションがかけ られており、さらにコーラス系のエフェクターもかけられている 様だ。ベースも、細かいリズムを刻んでいるので、ピッキングに 気をつけて正確にプレイするようにしたい。◎の部分から、リズ ムのノリとテンポガ変化している。ここからは、8ピートのリズ

ムだ。テンポはすこし速くなっているので、リズムがばらばらに ならないように気をつけたい。©の2小節目、ギター2の譜面にX 印の音がある。これは、左手で弦をミュートしながらピッキング しているものだ。回の部分は、ギター・ソロになっている。ここ では、シンセガオクターヴ・ユニゾンや、4度のハーモニーで重 ねられている。シンセの代わりに2本のギターを使って弾いても よいし、オクターバーなどのエフェクターをかけてみてもよいだ ろう。

□の最後の部分で、またテンポが変化しているので気をつ けよう。。D.S.②で回の2小節目に戻っているが、ここからは、ま た最初のリズムだ。このリズムの変化は、みんなの呼吸をぴっ りと合わせる様にすることガポイントだ。



© 1988 by Iron Maiden Publishing (Overseas) Ltd. The rights for Japan assigned to CBS/SONY SONGS







